

## 1. 研究背景と目的

6世紀の汎日本的な遺物である耳環は、被葬者の数や追葬の回数を目安として参考にされてはきたが、考古学的研究の対象にはあまりされてこなかった。その要因には、消長期間が約100年とあまりにも短いため形状差などからの出土時期の限定が難しいことや、追葬や攪乱などの出土状況のため所有者の特定が困難であることなどが考えられる。近年、自然科学的調査で、耳環は古墳時代の最先端金工技術が集約された遺物であることがわかってきた。本研究は、宗像平野出土耳環について自然科学的調査をおこない、まず耳環の種類を明らかにし、そのあと共伴の副葬品等と耳環を俯瞰することで被葬者の地位や職業に迫り、6世紀に生きた宗像人の姿を鮮明にすることが目的である。

## 2. 研究方法

まず、別府大学所有のデジタル顕微鏡、X線透過試験装置、X線透過試験装置、走査型電子顕微鏡などの科学機器を使用して宗像平野出土耳環の調査をおこない、①大きさや分布、②種類（材質・制作技法）や出土率、③製作当時の推測される色彩を明らかにし、年代との相関を考察する。

次に、宗像平野出土耳環の種類と色彩の割合を、福岡平野（広義）・松山平野・河内平野からの出土耳環と比較して、宗像地域の耳環の特徴を考察する。

そして、堀田啓一氏、新納泉氏、春成秀爾氏、三氏の研究を応用して宗像平野出土耳環と副葬品等を合わせて俯瞰することにより被葬者の地位や職業に迫り、6世紀に生きた宗像人の姿を鮮明にする。

## 3. 結果

自然科学的調査の結果、宗像平野出土耳環の大きさは、外径縦最長 33.3 mm、外径横最長 33.0 mm、外径縦最短 15.0 mm、外径横最短 15.2 mmであり全国規格にあてはまることがわかった。また宗像平野出土耳環に使われている金属材は、金（Au）、銀（Ag）、銅（Cu）、錫（Sn）、水銀（Hg）であること、種類は金無垢・銀無垢・錫無垢・銀無垢鍍金・銅芯銀板巻鍍金・銅芯金箔貼・銅芯金板巻・銅芯銀板巻・銅芯鍍金・銅芯鍍銀・銀地鍍金・金板造り・銀板造りの13種類であることなどがわかった。さらに年代との相関を調査した結果、太さや種類に時期的変遷があることを確認した。さらに製作当時の耳環の推測される色彩などを明らかにすることができ、宗像平野の「対」になると思われる耳環が10組あったことや、《形状》8類型なども明らかにすることができた。また比較をして宗像平野出土耳環の特徴を探った結果、まず宗像平野内釣川南北域で大きさ、種類と色彩に差異があることを確認した。広域比較では福岡平野（広義＝早良平野・福岡平野・粕屋平野）の種類と色彩、河内一須賀古墳群の種類と色彩、松山平野大池1・2号墳の種類と色彩を明らかにし、宗像平野の種類と色彩を比較した結果かなりの差異点・共通点が見られた。例えば種類では、宗像は銀板造りの中空耳環が多いが松山は銅地の中空耳環が多かったし、色彩金色比率は広義の福岡平野と松山平野が最も高く、次いで河内平野、最後に宗像平野の順であった。さらに、堀田啓一氏、新納泉氏、春成秀爾氏、三氏の研究を応用して耳環の種類と副葬品の関連から地位や職業の推定を試みた結果、宗像平野の耳環所有者の中には「首長」も「小首長」も「鷹匠」も「文人」も「巫女」も存在せず、耳環所有者のほとんどは馬や刀や弓を持った「武人」か「農夫」であることなどを明らかにすることができた。